

桜蔭俳話会 七月句会 (第三四七回)

墨ふくませて海と書く土用東風 朋子

添削:土用東風海と墨書の大玻璃戸

赤子泣く蟬鳴く真昼工事音 明美

鑑賞:別々の現象が一つに結晶化されている。

子の声は夏に始まる夏やすみ ツル子

添削:子の声の今に始まる夏休

晩夏光静かに止まる母の息 ヤエ子

鑑賞:多くの共感を得た看取りの俳句である。季語が働いている。

ところ天昔も今も素のままに ツル子

添削:ところてん今日は試しに素のままに

西日這ふおもちゃの世界交差点 かおる

鑑賞:俯瞰の俳句である。西日に照らされて交差点は、高所からは玩具の世界に見える。着眼が良い。次のようにすることもできる。

西日入るおもちゃ世界の交差点

夏桑や絹を支えしかか天下 ヤエ子

添削:連山や夏蚕支へしかか天下

火虫飛び交ふおほかたは変声期 朋子

鑑賞:設営されたテントの内外の状況が、活写されている。

戦中派説きし平和や大夕立 明美

鑑賞:戦中派とは、生まれた時期が単に戦中に過ぎなかったものか、戦争遂行に自分の意見を言えたものか。

杜疊むの原稿置くや胡蝶蘭 かおる

添削:店仕舞ひ夫と地植ゑの胡蝶蘭

空豆の半分ほどの塩加減

幸

添削 空豆やひとの半分ほどの塩

燕の巢落ちたるかこみ子等の知る 眞三

添削 燕の巢落ちたる囲み子の解きぬ

鉢巻きはみどり一色夏の街 明美

添削 鉢巻きのみどり一色梅雨晴れ間

花木権残せし花の紅冴えて ツル子

添削 花木権残る一花の紅冴えて

噴水の空を離れぬひと雫 朋子

鑑賞 佳句であるが、噴水と雫の取り合わせに既視性。

郭公や全身耳に森の朝 友子

添削 郭公の森全身を耳として

梅雨曇名前出てこぬもどかしき ヤエ子

添削 焦るほど出て来ぬ名前梅雨曇

蟬しぐれ退位を望まるる陛下 朋子

添削 典範のはばみし讓位蟬しぐれ

炎天に氷河の氷酒に入れ 眞壽

添削 炎天や氷河のかけら酒に入れ

蓮の葉に遠き日うつる水の玉 ツル子

添削 遠き日の映る水玉蓮一葉

豆騎手の仔馬に一声スタンバイ 幸

添削 仔馬へと子のひと声やスタンバイ

木曾谷の祭りの露店見歩いて 眞三

添削 木曾谷の旅籠の脇の夜店かな

ママチャリの塩の模様のサドルかな

かおる

添削ママチャリの汗の模様のサドルかな

蝟食ぶる訳面白し半夏生 友子

添削蝟食ぶる謂れのひとつ半夏生

肝つ玉かあさん逝くや白木権 ヤエ子

添削肝つ玉かあさん逝くや雲の峰

バス停は片陰毎に人がをり 眞壽

添削バス停の片影狭しクラクシヨン

神の座の力いただきし富士登山 幸

添削神の座の力たまはり登山杖

ダイエットのための一皿夏料理 友子

添削ダイエット始めの小皿夏野菜

ボーリング娘に勝てぬ夏の宵 眞壽

添削子に勝てぬボーリングや夕涼み

楽しむや庭のせましとゼラニウム

眞三

添削狭くとも庭に溢れしゼラニウム

大瀑布しぶき浴びつつ虹渡る 眞壽

添削水しぶき虹掴まんとするをさなかな

軽やかな衣装を身にし更衣 眞三

添削軽やかなこころつつみし夏衣

宅配の匂ひかぐ子のメロロン かおる

添削宅配の匂ひ漏れ来しメロンかな

こぼれ種狭庭にせまき紫蘇匂ふ ツル子

添削紫蘇匂ふ庭先去年のこぼれ種

鉛色の水滴々と梅雨の尾瀬 友子

添削 梅雨の水湛えし光り尾瀬ヶ原

澄みし溝小さき流れの目高の輪 眞三

添削 澄みわたる目高の溝や己が影

売れる家売れざる家の七変化 明美

添削 売れし家売れざる家や七変化

滑りやすき雨の木道きすげ咲く 友子

添削 きすげ野の雨の木道一歩づつ

風の道知る愛犬や夏の朝 ヤエ子

添削 夏の朝風の道知る散歩犬

夏草や会津土魂のなれの涯 眞壽

添削 夏の草会津土魂の立ちにけり

期限切れビール飲み干すおやじかな

かおる

添削 おやじ貌して期限切れビールかな

○ 不在投句 古野明美、稲葉幸、京林眞壽、岩崎眞三 文責(増田守)